

# Die Eiche

ディ アイヘ  
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft  
der Präfektur Chiba  
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1  
清和会第2ワールドナッシングホーム内  
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

## 「ドイツ統一の日」に思うこと

-壁の開放から30年経過して-

東西を28年間にわたり分断してきた「ベルリンの壁」は、1989年11月崩壊し、その翌年10月3日、東西ドイツは悲願であった統一を成就しました。今年（2019年）で「壁の開放」から30年が経過することになります。



筆者は、1989年の秋から冬にかけて、在外研究でフランクフルトにあるドイツ国際教育研究所を拠点として、ドイツ各地の教育機関を訪問する機会にめぐまれました。また統一後の1990年11月に、再び研究旅行でドイツを訪れることができました。

今年もまためぐってきた「ドイツ統一の日」を迎えるにあたり、改めて当時を思い起こすとともに、最近のドイツ情勢にも思いをめぐらせてみたいと思います。

ベルリンの壁が開放されたというニュースはミュンヘンで聞きました。ホーフプロイハウスという、かつてヒトラーが旗揚げしたときの集会場であったという大きなビアホールで、日本人研究仲間と楽しくビールを飲んでいました。そのときに、ベルリンの壁が開放されたというニュースが流れました。歓声がいたるところであがり、外ではそれを伝える号外も出ていました。

壁が開放されたのは11月9日ですが、その数日前はベルリンにおいて、東ベルリン市民の民主化を求める大規模なデモにも立ち会うことができました。市民たちの怒濤のようなシュプレヒコールが今でも耳に残っております。案内してくれたドイツ人（西の人）も興奮していました。

そのあと、ベルリンからミュンヘンへと向かう飛行機の窓から見た延々と続く壁の情景が今でも目に焼き付いています。その壁がそれから数日後に開放され、あれよという間に、1年もたたないうちに東西ドイツの統一が実現するとは、そのときはまったく夢にも思いませんでした。翌年11月、統一後のドイツを再訪問しましたが、今度は上空からベルリン市内を見下ろすと、壁の姿はすでに消えており、「壁がなくなった」ということを改めて実感した次第でした。

その後のソ連や東欧諸国における社会主義体制の崩壊、そして「マーストリヒト条約」に見られるように「ひとつのヨーロッパ」へ向けての大きな流れ、同時に一方では、ユーゴなどに象徴的に見られるような様々な民族紛争の頻発、他方では、移民、難民の問題など、ヨーロッパ統合とはかけ離れたところに存在するエスニックマイノリティ集団と彼らに対する排他主義の表面化等々、近年におけるヨーロッパのあまりにもドラスティックな歴史の流れを見ておきますと、こうした激動の発端のひとつを現地で体験できたということが、これを書いている今、たいへん感慨深く思い出されます。

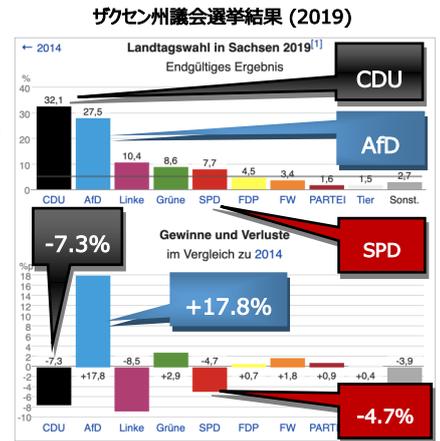
統一の際、東西ドイツ人が共有した「ドイツは一つ」という一体感、ほどなくして薄らいでしまったと言われています。統一の翌年（1991年）になりますと、東の人々の約8割は、自嘲的に自分た

ちを「二流市民」と感じているといったアンケート結果も出ています。

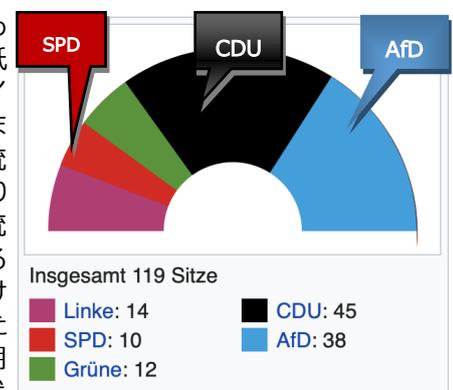
東西を隔てていた壁はなくなりましたが、「心の壁」は、30年たった現在でもなかなか解消されていないのが実情のようです。経済面での格差は徐々に改善されていますが、まだまだ給与、年金など、東の水準は西に比べて低いというのが現状です。

旧東ドイツは、西と比較すると、移民、難民の数はずっと少ないのですが、それにもかかわらず彼らに対する攻撃は西以上に強まっているとされています。民族主義的政治団体である「ペギーダ」（西欧のイスラム化に反対する愛国的欧州人）も、発祥地は旧東ドイツです。こうした動きが出てくる理由として、30年を経ても埋まらない旧西ドイツとの格差に対する不満の矛先が、弱い立場にある人々に向っているとも指摘されています。

先月（9月）、旧東ドイツのブランデンブルク、ザクセンで州議会選挙が行われました。その結果は、両州とも事前の予想どおり、移民、難民の排除を主張する極右政党とされる「ドイツのための選択肢」(AfD)が躍進し、前回（2014年）の第四党から第二党に躍り出て、第一党に迫る勢いをみせました。そのなかで、CDU（キリスト教民主同盟）、SPD（社会民主党）という二大国民政党の投票率は大幅に低下しています。一方で都市部では、緑の党も伸張しています。またドイツの人口構成も、移民を背景にもつ人々が約二割を占めるに至っています。



上図：獲得議席比率/下図：議席数増減比率（前回2014選挙と比較して）  
\*Wikipedia "Landtagswahl in Sachsen 2019" 説明より引用、追記



119議席数の党別獲得議席数  
\*Wikipedia "Landtagswahl in Sachsen 2019" 説明より引用、追記

統一後、筆者がもらったドイツの知人からの手紙には、「真の意味でのドイツ統一はこれから始まります」と書かれていました。統一から来年で30年となりますが、真の意味での統一は、まだその途上にあると言えるでしょう。それだけでなく難民、移民といった人々に対する敵視の風潮等々、憂慮すべき問題状況のなかで、国民の分断もまたいっそう深まっている感があります。

この先、ドイツはどう変わっていくのでしょうか。日本もドイツも、戦後は平和憲法のもとで経済大国への道を歩んできました。両国の置かれている状況は同じというわけではありませんが、共通する課題も少なくないと思います。ドイツの情勢をウォッチしていくことで、わが国の将来を考える上で少なからぬヒントも得られるのではないのでしょうか。（常任理事・編集委員 木戸 裕）

## アルザスの言語戦争 -独仏の言語変遷-

アルザス地方の建築を見てみると美しい木組みハウスであり、明らかにドイツ文化の香りがします。その中で歴史的に独仏間で帰属が変遷していますが、言語がどのように住民に引き継がれていったのか、その変遷を整理します。

アルザス地方には、元々ケルト人が居住していました。紀元前1世紀よりゲルマン民族、その後、ローマ軍団による侵略を受け、5世紀には、フランク族、アレマン族が北から、アルザス地方に侵入。以後、現地の日常的に使われる言語は、アルザス北部でフランク語、その他の地区は、アレマン語（ともにゲルマン語族）となりました。アレマン語は、西側は、ヴォージュ山脈を言語上の境界となり、広く南西ドイツ、スイスの独語地帯、Vorarlberg まで広がりました。5世紀にローマ軍団の影響もあり、ケルト人がケルト語を捨て、民衆ラテン語に切り替えた時期と重なります。

言語問題が決定的になったのは、1648年、30年戦争終結後、ヴェストファーレン条約で神聖ローマ帝国の傘下からフランスの宗主下になった時点から始まります。この条約締結後、アルザスの公用語は、仏語となりましたが、ルイ14世は、宗教改革派からカトリックを守る点からも現地の独語から仏語への強制的な切り替えは行いませんでした。住民のマインドも「国王の言葉であろうと」、現地独語を捨てる気には全くなかったそうです。

15世紀にグーテンベルクの印刷機が発明され、16世紀にルターによる宗教改革とルター聖書の広まりは、公文書での書き言葉や文学の世界で標準ドイツ語が使用され、学校教育、日常の会話では、独語方言が使われるという二重構造が暫く続きます。中流のブルジョア階級は、商取引の関係からもアルザス方言を捨て、仏語に積極的に切り替える必要性はありませんでした。

一方、18世紀に入ると、一部の上流階級では、仏語への移行が進みます。12世紀から13世紀の早い段階から、裕福なアルザス人は、子弟にフランス式の教育を施すことに熱心という傾向もあったとのことですが、上流社会では、仏語による交流が前提であり、仏語を使うことがステータスでした。

1789年に勃発したフランス革命は、アルザス地方の住民に仏語への切り替え要請が強まります。すなわち、革命推進者は、革命の趣旨を理解するには、フランス語まで同一言語が必要であるというコンセプト「一國、一言語」を追求しようとしたからです。アルザスには、革命に参加する者のみがそこに住み、その他は他の地区に移送、1/4のアルザス人は、ギロチンにかけるべきだという主張もなされました。

19世紀に入ると、ドイツ民族主義の台頭により、フランス革命時の「一國、一言語」の考えは、「一言語、一国家」となりました。当時の政治パンフレットに「ドイツの川であってドイツの国境ではないライン」という表現は、当時の思想を物語っています。学校教育、軍隊を通して住民の仏語への知識は改善されましたが、仏語教師の不足等もあり、ドイツ方言の優位性が続きました。

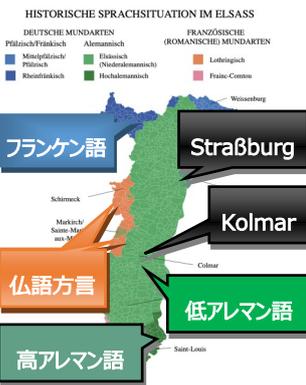
1870年の普仏戦争でフランスが破れて以降、アルザス地方では、公的機関では、仏語から独語への変更が行われました。以後、2回の大戦で言語優位が切り替わります。第二次大戦後は、フランスへの忠誠を示す上でも独語放棄、仏語使用が推奨、学校での独語教育が禁止となりました。

OLCAという組織（アルザス地方の言語文化局）に最近のドイツ方言使用状況の統計データを問合せたところ、2012年のデータを開示してくれました。住民（回答数801人）に対して43%が、アルザス方言を自由に使いこなせる。33%が、少しだけアルザス方言を聞く、話すことができる。25%が、まったくアルザス語はわからないという状況でした。年齢構成で見ると、74%は、60歳以上、54%は、45-59歳、24%は、30-44歳、12%は、18-29歳、12%は、18-29歳、3%は、3-17歳という年齢構成です。想定範囲ですが、ドイツ語方言使用者は、高齢者層と推定できます。

(理事・編集委員：勝見 浩明)



アルザス地形図  
\*Wikipedia "Elsass" 説明引用、追記



19世紀アルザス地方の言語分布  
\*Wikipedia "Alemannische Dialekte" 説明より引用、追記

## 日独スポーツ少年団通訳 -青壮年部 竹内 優さん 留学レポート最終回-



時が過ぎるのは早いもので、今回で留学体験記は最終回となります。

今回お伝えするのは、私が8/1～16まで通訳として同行していた日独スポーツ少年団同時交流についてです。1974年から続いており、今年で第46回目を迎えました。

毎年夏の同じ時期にドイツのスポーツ少年団が日本へ、日本のスポーツ少年団がドイツへ向かい(各国約90～125名)、それぞれの国でスポーツ、文化体験、青少年交流、ホームステイなどをします。私は2017年に初めてこの同時交流に通訳として、ドイツの柔道ユージェント担当となりました。去年は、ラインラント＝プファルツ・ザールラントのスポーツユージェント担当となり、四国3県をまわりました。今年、留学中なのでドイツで日本団の四国グループの通訳を務めました。

最初、日本団全員での活動をフランクフルトからスタート(7月31日～8月1日)、その後、担当となった、四国グループは、ザールラント州とラインラント＝プファルツ州を回りました(8月1日～14日)。そして最後に全体プログラムをベルリンで行いました(8月14日～16日)。地方プログラム中にホームステイでの宿泊、市庁舎などへの表敬訪問、ドイツの青少年たちを交えたディスカッション、歓迎会、さよならパーティーがあるのはどのグループも共通しているのですが、どんな場所を訪れて何をするかは全く異なります。

ドイツ側では通訳も団員と同じようにホームステイするというのが決まりだそうで、私もザールラント州、ラインラント＝プファルツ州で計2つの家庭でホームステイをしました。普段はリアルなドイツ生活というのはなかなか体験できないものなので、私にとっても非常に良い経験となりました。

今回同時交流に携わるのは3回目でしたが、日本とドイツは政治、経済、産業、外交で強い繋がりがあだけでなく、この同時交流のように青少年、スポーツ分野でも毎年様々な交流が行われているので、改めて素晴らしいと感じたと同時に、この先も日独間での人と人との繋がりがさらに広がってほしいと心から思いました。

来年は、東京オリンピック・パラリンピックが開催されるのに合わせて、日独スポーツ少年団ユースキャンプが、日本で行われます。ユースキャンプでは、日本とドイツの青少年がお互いに交流するだけでなく、オリンピック観戦や選手との交流も予定されているようです。

約1年間、私のハイデルベルク大学での留学生生活を応援して下さい本当にありがとうございました。



フランクフルト市庁舎の表敬訪問



ザールラントにある絶景ザールシュタイフ



ザールラントでのさよならパーティの様子



ラインラントプファルツでのホストファミリー滞在の様子(世界地図で独日の位置を確認)

# 音楽を通じたドイツとの出会い



## ドイツと私 - 佐藤 守彦

本年1月から入会させていただきました  
横浜市在住の佐藤守彦と申します。

鎌倉市の病院で勤務医をしております。ドイツ語の達人ぞろいの皆様と比較すれば未だに初心者レベルで誠にお恥ずかしい限りですが、ドイツへの強い憧景に免じてお許しいただければ幸いです。

私が人生で初めてドイツ文化に触れたのは中学1年生のとき、友人宅でフルトヴェングラー指揮のベートーヴェン第九交響曲のLPレコードを聴かせてもらった時でした。もっとも当時中学生の小僧にフルトヴェングラーの偉大さや背後にあるドイツ文化が理解できるはずありませんでした。

その後まもなく、自分で初めて購入したLPレコードはミュンヒンガー指揮の四季でした。当時決定的名盤としてイ・ムジチ合奏団の四季が君臨していたのに、何故ミュンヒンガー盤を購入したのか今となっては不明です。

しかし、この自己紹介文を機に改めてこの2枚のLPレコードを聴いてみると、まさしくドイツらしい重厚さ、規律性、秩序正しさといったものを感じることができました。

高校時代は受験勉強で得意だった英語の勉強をする傍ら、ベートーヴェン、ブラームス、ブルックナーといったドイツ音楽に触れることができました。

大学に入り第二外国語としてドイツ語の勉強を始めました。当時三修社の『Mein Deutsch』という雑誌があり、雑誌とカセットテープで勉強しました。またNHKラジオのドイツ語講座でも勉強しました。

大学4年生の頃、新任の佐藤清明教授の個人的な輪読会に参加してヘルマン・ヘッセの作品に触れることができました。奥様がドイツ人で年に数回大学宿舍での食事会に招待していただき、奥様手作りのドイツ料理を堪能できました。

また近隣病院の先生が主宰する輪読会ではツヴァイクに触れることができました。

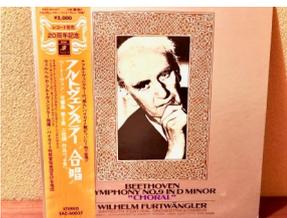
その後社会人となり、多忙な日々の診療に追われてドイツ語の勉強は中断してしまいました。今振り返ってみるともっと強靱な意志があれば高いレベルをめざして継続できたのに、失った時間を考えると残念でなりません。

近年、当会の運営委員である勝見さんが、Facebookで精力的にドイツについて情報発信されていて、触発されてドイツ語の勉強を再開しました。ドイツ語検定2級には合格しましたが、やっとスタートラインに立ったところで、まだまだ勉強が足りません。

入会を機にもっとドイツ語について、ドイツについて深く知りたいと思います。



質量分析装置の前の筆者（細菌検査室）



中学時代に体験したドイツ音楽



大学時代のドイツ語カセット教材

# Düsseldorf 奨学生との 歓迎夕食会

9月3日 18:00-20:00、JR新検見川駅前「越中音酒場 はなぞの座」で、当協会金谷会長以下11名が、デュッセルドルフ奨学生6名、他のドイツ人留学生1名、引率者1名、千葉県・国際課関係者2名の計19名にて立食パーティが開催されました。

デュッセルドルフ市と奨学財団が毎年、日本に関心を持つ若者を募集し、約1か月間、日本へ派遣。各自の専門分野で日本企業や団体での研修体験や観光地巡りを行います。今回の奨学生たち（女性3名、男性3名）の専門は、統計学、コミュニケーションデザイン、文筆学、実業家、製薬会社生物実験、機械工学の多方面にわたっています。

当日は、来日2日目でした。奨学生は、昼間、デュッセルドルフ市と千葉県の友好関係から、千葉県内で太巻き体験や、浴衣を着る体験などを行った後、歓迎夕食会に参加されました。



和やかな雰囲気にもまれておりましたが、イベントを盛り上げたのは、奨学生へのお土産でした。各人の名前を漢字で毛筆で書いた色紙を進呈しました。非常に喜んでおられました。（理事・編集委員：勝見 浩明）



# Düsseldorf Abend 2019

9月5日 18:00-21:00、ホテルニューオータニ「芙蓉の間」にてデュッセルドルフの夕べが開催されました。当協会からは、金谷会長以下27名が出席しました。

出席者は、総勢、1,200名-1,300名とも言われ、「芙蓉の間」が狭く感じられる程でした。

華やかな雰囲気につつまれつつ、デュッセルドルフのガイゼル市長、レーペル駐日ドイツ大使、森田県知事による挨拶がなされていました。また、デュッセルドルフの地ビールの“Altbier”を楽しく飲み交わす人々を多く見かけました。

2日前の9月3日、新検見川でDüsseldorfからの奨学生の歓迎会を行いました。その際の奨学生と再会することもでき、当日、歓迎会には参加できなかった協会会員とあたらに奨学生との懇談も進み会話を楽しまれていました。また、新任のレーペル駐日ドイツ大使と会員が個別に挨拶をすることもできました。楽しい時間を過ごすことができました。 (理事・編集委員：勝見 浩明)



入場前、参加者集合写真



華やかな会場の様子



和やかな雰囲気



Düsseldorf奨学生との再会

竹内さんには、この一年間、Die Eichelに「ドイツにおけるキャンパスレポート」を連載してくださいました。その他、お誕生日を迎えた方へのプレゼント、ジャンケン大会など会場は盛り上がりました。

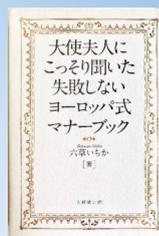
今回も福 康子さんの伴奏で用意されている歌集から、全員でドイツ民謡を歌い、非常に会場は盛り上がりました。

(理事・編集委員：勝見 浩明)



## 書籍/Buch

1988年からドイツに在住、ドイツ人との結婚、子育て、就労を通じてドイツ社会と深く関わってきた著者が、レセプションやパーティなどの社交の場でのエチケットやマナーをシチュエーションごとに簡潔に紹介。礼儀作法という習慣から見たヨーロッパ文化を楽しく知ることができます。



例えば招待状が届いてから出欠の返答をするまでのタイムリミット、パーティーに呼ばれたときの服装、招かれたお宅への望ましい訪問時間、訪問時のエチケット、挨拶の仕方、テーブルに着席するとき、招待席に着席した時から食事時のテーブルマナー、食事に対するエチケット、カトラリー・ナプキンの使い方、乾杯の仕方、冠婚葬祭での贈り物、クラシックコンサートでのマナー等が紹介されていて、ヨーロッパに旅行した場合やヨーロッパの人達との交流に役立つマナーについてもわかりやすくまとめられています。また、礼儀作法に対するドイツ人と日本人の考え方の違いや、ドイツでは避けたいマナー等ドイツの生活で実際に体験した著者から見た視点で書かれた単なるマナーのマニュアル本に終わっていない内容がとても興味深い一冊です。六草いちか著、大修館書店 1,600円 税別 (理事・青壮年部・編集委員：本間 実里)

## 今後の予定

- 10月26日 食べ歩き会<ドイツパンの店 タンネ> 中央区日本橋浜町 2-1-5  
11:00-12:30 会費 ¥1,500- +税  
●食後、希望される方は、風情のある街を探索します。
- 11月7日 ドイツ大使講演会、懇親会 ホテルグリーンタワー幕張「イル・デ・パン」  
18:00-19:00講演会、19:00-20:00懇親会 会費 ¥5,000-
- 11月17日 ドイツ軍人慰霊祭 11:00-12:00予定。 船橋市宮習志野霊園

## 2019 ビール祭り

9月14日 17:00-19:00、JR新検見川駅前の「越中音酒場 はなぞの座」で恒例の千葉県日独協会ビール祭りが開催されました。

当日の出席者は、30名でした。いつものように須古理事による場の空気を的確にとらえた絶妙の司会により、ビール祭りは、大いに盛り上がりました。

当日は、新規に当協会に入会した松浦 一氏と奥様のご挨拶、また青壮年部で活躍されている竹内 優さんのご挨拶もなされました。竹内さんは、丁度、今年のビール祭りにてハイデルベルク大学の修士課程で同時通訳を学ばれるということで壮行会を兼ねて送り出しましたが、今回のビール祭り直前に帰国、歓迎会も兼ねておりました。



## 会員情報

新人会員	植松 健	松戸市
	片島 辰一郎	松戸市
	松浦 一	佐倉市
法人会員	医療法人 同和会	千葉病院、社会福祉法人 清和会、
	(株) 京葉ビル管理、(株) 和幸電気工事、	
	メルセデス・ベンツ日本 (株) 習志野事業所	

## 編集後記

台風15号で被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げます。地域に根差す住民のマインドという点で今月は、一つのテーマを取上げました。一つは、巻頭における東部ドイツにおけるマインド、もう一つは、アルザス地方における住民マインドです。ドイツ語の一方言であるアレン語を生活圏で用い、公共機関等の公の場においては、書き言葉としてのドイツ語使用、そして国家間の変遷によってフランス統治者は、教育、公共機関でのフランス語使用を訴えながら、なかなかマインド変更せずにアレン語の使用を続けます。初頭教育からのフランス語教育の導入で長い期間を経て基礎導入ができましたが、19世紀末でアレン語が支配的であったのは、興味深かったです。ドーテの「最後の授業」も普仏戦争後、明日からフランス語を学ぶことはできないという象徴的な場面がありますが、当時、日常的には、ドイツ方言を使っており、ドイツ語使用については、本来生徒は、抵抗する必然性がなかったという点は、見過ごされているかと思えます。勝見 浩明